

新 MEGA のベンサム評注

赤 間 道 夫

凡 例

1. 『資本論』は、*Marx-Engels Werke*, Bde. 23, 24, 25, Dietz Verlag, Berlin, 1962—64. を使用し、K. I, S. 111. のように文中に略記した。
2. 『資本論』以外の著作は、うえと同じ *Marx-Engels Werke* を使用し、*MEW* と略記し、巻数および頁数を文中に表示した。
3. *Marx/Engels Gesamtausgabe*, II/5, 6, 7, 8, 9. については、II/5, S. 111. のように文中に略記した。

I

周知のように、新 MEGA の刊行により、マルクス・エンゲルスの著作活動の全貌が明らかにされつつある一方で、新 MEGA それ自体のいくつかの欠陥が指摘されてもいる¹⁾。さきにとりあげたベンサムについても²⁾、世紀の大事業のわりには用意周到さにいささか欠けるうらみがある。東ドイツの「消滅」

1) たとえば、三宅義雄「MEGA (メガ) についての雑記(1)~(6)」大東文化大学経済学会『経済論集』第40号, 1987年10月; 第45号, 1988年3月; 第47号, 1989年2月; 第49号, 1989年12月; 第50号, 1990年4月; 第52号, 1991年3月, 参照。

2) 赤間「マルクスのベンサム論——『自由, 平等, 所有そしてベンサム』の解剖——」本誌第22号, 1989年11月, 赤間「マルクスとベンサム——文献上のかかわりで——」本誌第23号, 1990年11月。

によって新 MEGA の事業も危機的な状況にあり³⁾、弱い者を夫にさすことになりかねないが、ベンサムにかんするいくつかの新知見を認めておくことにしよう。

II

さて、新 MEGA において、既稿で分析と紹介を試みたベンサムについて、いかなる書誌的解説をおこなっているのであろうか。既刊分は、II/5 (1983) = 『資本論』第1巻初版 [1867] , II/6 (1987) = 『資本論』第2巻第2版 [1872] , II/7 (1989) = 『資本論』第1巻フランス語版 [ラシャートル版] (1872—75) , II/8 (1989) = 『資本論』第1巻第3版 (1889) , II/9 (1990) = 『資本論』第1巻英語版 [ゾンネンシャイン版] (1887) の5種であるが、それぞれの特徴を摘記することからはじめよう。まずは、「自由、平等、所有そしてベンサム」(K.I, S. 189~190.) にかかわる評注について。

II/5 においては、当該箇所(S. 128.) の「解説 (Erläuterungen)」として、「ジェレミー・ベンサムは、いわゆる功利主義 (Nützlichkeitsphilosophie, Utilitarismus) を代表する。個人の利害は、すべての行為の起動力である。しかし、すべての利害は、もしそれらが十分に理解されるならば、ある内的調和にあるだろう。個々人のよく理解された利害はまた社会のそれでもある、とする。」(S. 730.) としている。また、「予定調和 (prastabilierete Harmonie)」(K.I, S. 190, II/5, S. 128.) に、「予定調和とは、ライプニッツの哲学、とりわけかれの单子論 (Monadenteorie) によれば、神が個々人の、さらには世界の相互に独立して存在する事物をあらかじめ定める、というものである。」(II/5, S. 730.) とする評注を掲げている⁴⁾。II/6 (S. 1308.) , II/7 (S. 997.) では、II/5 とまったく同一の

3) 明石博行「新メガ問題の背景と現状」『科学と思想』第77号, 1990年7月, 宮川彰・大村泉「新『メガ』の編集・刊行をめぐる最近の動向」『経済』第318号, 1990年10月, および, マルクス・エンゲルス研究者の会『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第11号, 1990年9月; 第12号, 1991年2月; 第13号, 1991年6月, での新 MEGA 編集・事業をめぐる情勢を参照されたい。

評注がみられる。II/8では、ベンサムについてはII/5(したがってII/6,7)と同一であるが、「予定調和」については、あたらしく「ゴットフリート・ヴィルヘルムによれば」なる一句が追加されている(S. 1033)⁵⁾。II/9では、ベンサムおよび「予定調和」ともII/8と同一の評注がある。ただし、「所有」については、II/8のような処置が施されていない。

みられるように、新 MEGA の刊行に歩調を合わせるかのように、ベンサムについての「解説」は徐々にきめ細かなものになってはいるが、もっとも肝要なベンサムの文献の特定と照合とはいまだ果たされていない。かの箇所になにゆえベンサムが登場しなければならぬのか、という筆者の問いかけをして、まったく根拠がないとさせるほどの書誌的裏付けを見ることはできない。もとより、筆者がかつて試みたように文脈にそくした解明と『資本論』が登場する歴史的背景の摘出とにより独自に明らかにできることとはいえ、マルクスが問題にしたレベル以上の「解説」の域を出ていない、といわざるをえない。さらに、次項でも触れる「いわゆる労働元本」の箇所ですら「ブルジョア的愚鈍の天才」(K.I.S. 637, Anm. 63) とベンサムを評することになった根拠についても一切問うていないのであって、この意味では『資本論』ではこのように、双方のばあいとも、その典拠たるべき文献が、また当該文献中の所在箇所が、示されていない。II/5もII/6もこの点を素通りしている。筆者の探索もかなえ

4) 新日本出版社版『資本論』第2分冊では、「世界を形成する実体はモナド(単子——または単位の意)であるが、モナドからなる世界に秩序があるのは、神があらかじめモナド相互に調和をもたらすように定めたからであるとするドイツの哲学者ライプニッツの説にもとづく考え。普遍的調和とも言う。」(301頁)と訳注が付されている。

5) このII/8では、「所有! というのは、だれもみな、自分のものを自由に処分するだけである。」(K.I.S. 190, II/8, S. 191.)への「解説」があたらしくつけられている。

[Denn jeder verfügt nur über das Seine.] Anspielung auf Platons Definition der Gerechtigkeit „Denn wir haben ja festgesetzt und oftmals gesagt…, daß Jeder sich nur auf Eines befleißigen müsse von dem, was zum Staate gehört, wozu nämlich seine Natur sich am geschicktesten eignet. …Und gewiß, das Seinige tun und sich nicht in Vielerlei mischen, Gerechtigkeit ist…” (Der Staat, IV, 10.) Cato hat den Grundsatz auf den Besitz bezogen: „Suum cuique per me uti atque frui licet.“ (Soweit es an mir liegt, darf jeder das Seine nutzen und genießen.) (A. Gellius: Noctes Atticae XIII, 24, 1.) „Suum cuique” (= Jedem das Seine) galt dann als römischer Rechtsgrundsatz. (Corpus iuris civilis. Digesta I, 1.)

られなかったが、素通りが許されるはずはなかろう。」⁶⁾との指摘はまさに的確といえよう。

III

つぎに、マルクスがベンサムを俎上にのぼしている「いわゆる労働元本」の箇所について新MEGAでの処理を瞥見してみることにしよう。この箇所では、うえで述べたように、本来ならばベンサム文献の特定を必要とする部分と、もともと『資本論』でベンサムの文献が特定されている部分とがある。前者については、新MEGAでの成果をみることができなかったが、後者についてはどうであろうか。

II/5では、*Théorie des peines et des récompenses, ouvrage extrait des manuscrits*. Par Et. Dumont, 3, ed. T. 2, Paris 1826. (S. 1004)とマルクスが本文中で明記した t. II, 1, IV, ch. IIを簡略化した典拠書誌を記している。これとは別に、(1)「『筆をとらぬ日々はなし』をモットーとするこのけなげな男は、こんながらくたで山なす著書を満たすのである。」(K.I, S. 637, II/5, S. 492.)の「筆をとらぬ日々はなし *nulla dies sine linea*」をドイツ語で置き換えたうえで (Kein Tag sei ohne einen Strich), 「この言葉は、古代ギリシャの画家アペレスにちなんでおり、彼はたとえわずかでも毎日規則ただしく自分の絵画に手を加えたという。」説明をあたえている⁷⁾。(2)さらに、うえの文章に続く、「もし友人H・ハイネほどの勇気を持ち合わせていれば、私はジェレミー氏をブルジョア的愚鈍の天才と呼びたいところである。」(K.I, S. 637, II/5, S. 492.)とベンサム裁断の結論部分には、「1853年頃成立したハイネの詩 *Kobes I* を指している。そこではハイネはヤーコフ・ヴェネディ Jakob Venedey と議論し、

6) 江夏美千穂「『資本論』中の引用文献にかんする資料集【III】」『東京経大会誌』第158号, 1988年12月, 148頁。

7) 新日本出版社版『資本論』第4分冊では、多分この新MEGAの「解説」を参考にしたと考えられる訳注のほかに、「プリニウス『博物誌』, 第35巻, 36の12」(1050頁)と典拠文献をあげている。

つぎのように書いた。」(II/5, S. 914.) として以下の一句をあげている⁸⁾。

Erwählt den Sohn Colonias,
Den dummen Kobes von Cöllen ;
Der ist in der Dummheit fast ein Genie,
Er wird sein Volk nicht prellen.

II/6 では、*Thèorie* が2巻本であることを示す T. 1. 2が挿入されている (S. 1639.)。(1)についてはまったく同一、(2)については一切の修飾を排除して、ハイネの詩 *Kobes 1* と詩の一節という簡略化した「解説」が付されている (S. 1512.)。II/7 では、本文中に、原典 [ラシャートル版] においてベンサムの著作 *Thèorie* が掲げられているだけのものに t. II, 1. IV, ch. II と補足をする体裁をとり (S. 531.)、*Thèorie* については II/6 と同一の処理をおこなっている。(1)については、II/5, 6 と同一であるが (S. 1217.)、(2)については、原典でハイネについての言及がないというラシャートル版での一定の変更をふまえて、II/5, 6 とは異なる「解説」になっている。II/8 では、ベンサム関連についてはすべて II/6 と同一の扱いである。II/9 では、まず、原典 [ゾンネンシャイン版] で巻末に掲げられた Works and authors quoted in “Capital” の記載 *Thèorie des peines et des récompenses(d'aiores des manuscrits inedit, ed. by E. Dumont)*, Londres, 1811.⁹⁾ に対応したリストが付加されていること以外には、II/6, 8 と同一である。

以上のように、新 MEGA において、マルクスが『資本論』で参照を指示していた以上の書誌的新事実は、提出されていない。紹介したようないくつかの発見をのぞけば、ことベンサムについては皆無とっていい。マルクス自身が

8) 江夏『『資本論』中の引用文献に関する資料集 [X]』前掲誌第165号、1990年3月、によれば、II/5 そして後述する II/6 においてはじめてこのマルクスの断言がハイネの詩にちなむことが確定されたとし、*Kobes 1* は *Heinrich Heine Samtliche Schriften*, Bd. 6—1, München 1975, p. 235 に特定されている (273, 289, 304, 307頁)。

9) *Thèorie* の初版本である。ロランド・ダニエルズが作成したマルクスの蔵書目録によれば、この初版本の記載があるところから、マルクスが所蔵していたようである。また、『経哲手稿』第1ノートの冒頭文献リストには、『資本論』で明示された第3版 (1826) の記載がある。この点については、服部文男東北大学名誉教授のご指摘による。

参照をもとめ、『資本論』に書き記した当該参照箇所すら「解説」されていないのはなぜだろうか。単純な作業であるはずなのに、ほかの編集作業に埋没されてしまったかのように、ごく簡単に扱われているのはなんとも解せないといわなければならない。そもそも、ベンサムがこれほど冷遇されるのは新 MEGA 編集者の責任ではなく、マルクスその人の筆致による。マルクスが「愚鈍」なる辛辣な評価がなかったとしたら、あるいは別の処遇がベンサムに与えられたかもしれないし、新 MEGA の編集もそれ相当の敬意が払われたものになったものといえなくもない。

IV

つぎに、ベンサム評注にかかわるいくつかの事実をおさえておこう。前稿¹⁰⁾において、マルクスが「社会的資本を、固定した作用度を有する固定した大きさのものとして把握する」という「偏見をはじめてドグマとして固定した」人物として、その断定をベンサムに与えることになったベンサムの著作の叙述を再現した。ところで、前稿発表以前にこのベンサムについての調査がすでに存在していた¹¹⁾。以下の書誌がそれである¹²⁾。

[B—XVIII] J.Bentham : *Théorie des Peines et des Rècompenses*, trad. Et.Dumont, 3ème éd.T. 2. Paris 1826.

① 1. iv, ch. II (p. 282—287)

1. iv Des encouragement par rapport á l'industrie et au commerce (p. 255—394).

ch. II Emploi le plus avantageux des capitaux (p. 282—287).

I. Que l'industrie est limitée par le capital.

10) 赤間「マルクスとベンサム」参照。

11) 江夏「『資本論』中の引用文献にかんする資料集 [II]」前掲誌, 第156号, 1988年6月, 167~8, 186~7, 206頁, 同「『資本論』中の引用文献にかんする資料集 [III]」前掲誌, 第158号, 1988年12月, 94~7, 144, 146~8頁参照。

12) 江夏「『資本論』中の引用文献にかんする資料集 [II]」186~7頁。

II. Que les individus intéressés sont les meilleurs juges de l'emploi le plus avantageux des capitaux.

前稿で再現したベンサムの叙述そのものではないが、原典調査をふまえた成果がみられるところである。ただし、第4部の頁付け p.255—394は、p.267—394の誤記ではないかと思われる。江夏稿でベンサム自身の著作にもとづくマルクスによる批判の根拠の文献的確認が、前稿でその全文の再現が、それぞれ果たされたわけであり、新 MEGA で軽く一蹴されていたベンサムの叙述がようやく日の目をみることになった。

さて、そうするとあらためて、マルクスが「いわゆる労働元本」の箇所而言及した数人の先行する経済学者たちにたいして、新 MEGA でいかなる扱いがされているのかに興味の焦点がうつる。『資本論』の当該箇所において人名の指示と著作との両者が明示されているのは、このベンサムのほかには、「このドグマを主として流通過程の立場から批判している。」(K.I.S. 637. Anm. 64.) として著書からの引用をもって肯定的な処遇をあたえられている S. ベイリー(Bailey)と「J・S・ミルたちのような人々は、彼らの古い経済学的ドグマとその近代的傾向とのあいだの矛盾ゆえに非難されて当然だとしても、彼らを俗流経済学的弁護論者と混同することはまったく不当であろう。」(K.I.S. 638. Anm. 65) と限定を付しながらも批判的紹介がある J・S・ミル(Mill),そして、本文中で「労働元本の資本主義的制限をその社会的な自然的制限につくり変えることが、どんな馬鹿げた同義反復に行きつくかを」「見せてくれる」(K.I.S. 638.) 例として挙げられている H・フォーシット(Fawcett)の3人である¹³⁾。

ベイリーからみてみよう。II/5では、*Money and its vicissitude in value ; as they affect national industry and pecuniary contracts : with a postscript on*

13) 「このドグマは、ベンサム自身、またマルサス、ジェイムズ・ミル、マカロックなどによって、弁護論的な目的のために、とりわけ資本の一部である可変資本を、すなわち労働力に転換されうる資本を、ひとつの固定した大きさのものとして描くために利用された。」(K.I.S. 637.) とあるベンサム、マルサス、ジェイムズ・ミル、マカロックについては、すでに述べてきたベンサムについてと同様に、すなわちマルクスが文献をとりわけ特定していないという処置と同様に、新 MEGA (II/5~9) での新しい書誌的事実の発見はない。

jointstock banks. London 1837. を挙げ、さらに、『ロンドン 1851 ノート V に抜粋』と記している (S. 1003.)。『解説』では、マルクスの引用 (K.I.S. 637.) に該当する箇所を掲げるとともに¹⁴⁾ (II/5, S. 915), *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie* に同文が抜粋されていることをも明示している (II/1.2, S. 475—6)。II/6 では、『抜粋ノート』への指示を省いた上記と同じ書誌および *Grundrisse* への参照を付記しない原文が紹介されている (S. 1639, S. 1513.)。II/7 では、ほぼ II/5 と同一であるが、II/6 と同じく *Grundrisse* への参照がない。II/8 は、II/7 と同一である。II/9 では、原典に目録が掲載されているとの対応させてか、原文の紹介までの処置をおこなっていない。

J・S・ミルの場合はどうかを つぎに紹介してみよう。II/5 では、マルクスが注65で引用した同文は見いだされなかったとして、ミル『経済学原理』第2篇第1章第3節からかなり長文の文章を紹介している (S. 915—7.)。ちなみに、このミル『原理』については、伝えられていない *Kleinen Heft* と『ロンドン 1850 ノート I』に抜粋されていることを記している (S. 1016.)。II/6, II/7, II/8 は II/5 とまったく同一であり、II/9 ではベイリーと同様の形式で簡略化されている。

最後にフォーシットを見てみよう。彼の場合には『資本論』の本文中で引用され、注で文献と参照頁が明記されていることから、新 MEGA では原文の確認が容易だったらしくそれ以上のものがつけ加わってはいない¹⁵⁾。

このようにみえてくると、新 MEGA のペンサムにかかわる評注は、とりたてて論評するほどの成果を提供してはいないことがわくろう。前2稿で分析の必要性和重要性とを提起した筆者の問題関心からすればはなはだ不十分なペンサム評注といえよう。

14) 江夏『『資本論』中の引用文献にかんする資料集 [I]』前掲誌、第155号、1988年3月、でも原文の確認がおこなわれている (96~97頁, 128~129頁)

15) 江夏『『資本論』中の引用文献にかんする資料集 [VII]』前掲誌、第162号、1989年9月、でもこのことは確認されている (118~121頁, 151~152頁)。

V

以上のような新 MEGA でのベンサム評注をふまえつつ、前 2 稿で一定試みたマルクスのベンサム論をさらに補強しておこう。

(1) 「ジェレミー・ベンサムは純粋にイギリス的な現象である」(K.I, S. 63 6. Anm. 63.) と断定することについて。この注において、「素朴きわまる無味乾燥さで、近代的俗物、とりわけイギリス的俗物を標準的人間として想定する」としているように、マルクスにとっては、「大衆のイギリス人」(『聖家族』MEW, 2, S. 199.) であるベンサムは、なによりも「近代市民社会の内部ではすべての関係が、實際上、抽象的な貨幣関係および商売関係というひとつの関係のもとに包摂されているという事実」(『ドイツ・イデオロギー』MEW, 3, S. 394.) から生じてくる「人間相互の多様な諸関係をすべて有用性というひとつの関係に解消する」「一見形而上学的な抽象」(*ibid.*)に還元してしまう特徴をもっている。政治的にいえば、ベンサムは「ブルジョアジーが政治的権力を奪取した最初の進撃と同時」(*ibid.*)に、つまり、「支配している発展したブルジョアジーに対応」(S. 397.) したものである。ベンサムの主要著作が「フランス革命とイギリスにおける大産業の発展との最中、およびそれ以後に書かれた」(*ibid.*)ことから判明するように、まさに「ブルジョアジーがもはやひとつの特殊の階級としてではなく、自己の諸条件が全社会の諸条件であるような階級として登場」(S. 398.) したことによる。「経済的諸関係、とくに分業と交換」(*ibid.*)とを理論内容として包摂することによって、個々人の私的利益追求の活動はそのままで公益性を保持し、「現実に存在するすべての関係を功利関係のもとに完全に包摂し、この功利関係をそれ以外のすべての諸関係の唯一の内容にまで無条件に高めること」(*ibid.*)が可能になる。もちろん、現実の諸関係にあってはブルジョアジー間の利害も複雑であって、地主・資本家・労働者間における階級の社会的地位によってその功利関係も影響をうける。こうした緊張関係にあってみれば、現存の人間相互の関係をば超歴史的で有益なものであるとする歴史的性格を刻印させる理論内容が要請されよう。たぶん、こう

したベンサムについての歴史的段階をふまえた理論内容を前提に、マルクスは簡単明瞭な断定的結語たる「イギリス的現象」というのであろう。

(2) J・S・ミルらも「いわゆる労働元本」を主張しているが、「俗流経済学的弁護論者の連中と混同することはまったく不当であろう」(K.I.S. 638. Anm. 65.) と弁護していることについて。この注は、本文のつぎの文章に付されたものであった。「このドグマの根底にある事実はずぎのようなものである。すなわち、一方では労働者は、非労働者の消費手段と生産手段とへの社会的富の分割にさいして口をはさむ権利がないということ、他方では労働者は、幸運な例外的場合にのみ、富者の『収入』の犠牲においていわゆる『労働元本』を拡大することができるということである。」前項で触れたように、ミルからの引用はマルクス独自の解釈を含むものであり、ミル『原理』そのものとは異なるものであった。それにもかかわらず、この引用をもってマルクスが主張したかったことは、この弁護の前段にある「古い経済学的ドグマ（社会的資本をば固定した作用度を有する固定した大きさのものとして把握するという労働元本の考え方と読め：引用者注）」と「その近代的傾向（ミルたちの理論の持つ『相対的進歩性』¹⁶⁾と読め：引用者注）」とのあいだの矛盾はいたしかたないとしたうえで、「現存のものたんなる弁護論」（『ドイツ・イデオロギー』MEW, 3, S. 399.）ではないのだ、というところにある。たしかに、マルクスによればベンサムもミルも「支配している発展したブルジョアジーに対応」（既出）したものであり、総じていえば、「近ごろのすべての経済学者たちのもとで功利説」は「現存のものたんなる弁護論」＝「現存の諸条件のもとでは人間相互の今の諸関係が最も有利な最も公益的なものであるという証明」（『ドイツ・イデオロギー』MEW, 3, S. 399.）にしてしまったとはいえ、うへのマルクスの一定の擁護はミルをしてこうした範疇で捉えてしまっただけではないことを明示するものといえる。本文中にある、「ベンサム自身、またマルサス、ジェイムズ・ミル、マカロックなど」とは明確に一線を画してミルの位置づけが

16) 杉原四郎『ミルとマルクス [増訂版]』ミネルヴァ書房, 1967年5月, 185頁。強調は杉原のもの。

新 MEGA のペンサム評注

あり，この点注意を要しよう。

[1991.7.29成稿]